八千代の庚申塔







八千代市郷土歴史研究会 6 月例会 2020.6.20 蕨 由美

はじめに 庚申塔とは

庚申塔は、最も普遍的で数も多く、近世からの村落共同体建立の石塔を代表する石造物です。

庚申待は、六十日に一回庚申の夜に、眠った人間の体から三尸が抜け出し天帝にその人の罪過を告げられないよう徹夜するという道教に由来した信仰で、室町時代ごろから庶民にも浸透し庚申講が行われるようになると、その供養の証しとして「庚申塔」を建立する風習が、江戸時代、各地に定着しました。

庚申塔は、ムラに悪霊が入らないよう、街道の辻に建てられることも多く、また道しるべを 兼ねる庚申塔もみられます。





小池の日蓮宗系庚申塚

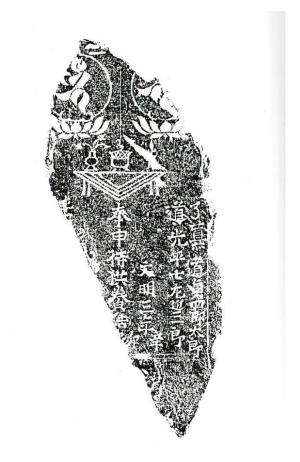
高津字宮ノ前(自衛隊駐屯地内)

最古の庚申供養板碑

中世の初出は、「奉申待供養結衆」銘が刻まれた川口市実相寺の文明3年(1471)銘の板碑です。



左写真は、川口市HPより

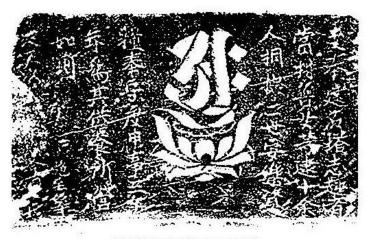


右拓本は『図説庚申塔』縣敏夫より

北総最古の庚申塔

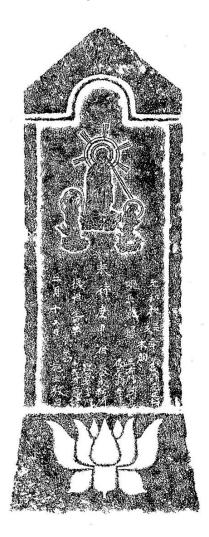


北総では、香取市貝塚来迎寺個人墓地内に、「天正 二二年」(4年1576)「當村善女」により「奉守庚申」 三ヵ年供養のために建立されたとの銘が刻まれた 宝篋印塔があります。

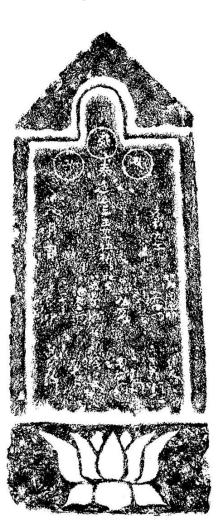


基礎部正面銘文の拓本

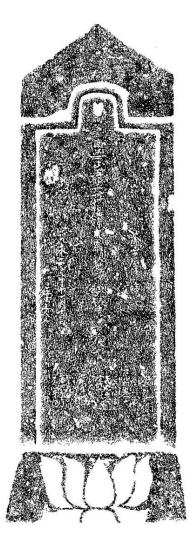
近世庚申塔の関東での初出



足立区正覚院 弥陀三尊来迎塔 元和9年(1623)



三郷市常楽寺 山王廿一社文字塔 元和9年(1623)



松戸市幸谷観音 山王廿一社文字塔 寛永2年(1625)

近隣の江戸時代初期の庚申塔



佐倉市の先崎地蔵尊 慶安3年(1650) 「奉造立庚申人数二五人 先崎村」銘



我孫子市手賀 高野山香取神社 万治2年(1659)板碑型庚申塔 「奉造立庚申講衆二世安楽所」銘

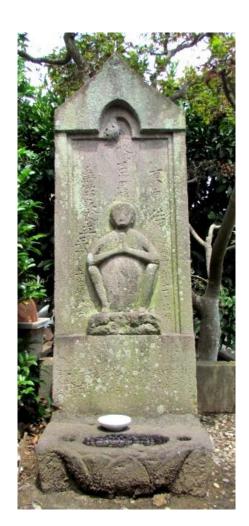


船橋市最古の庚申塔 寛文4年(1664)鈴見町墓地

近隣の初期の猿像庚申塔



三猿駒型型 寛文10年(1670) 佐倉市海隣寺町愛宕神社



一猿板碑型 延宝3年(1675) 佐倉市上座S家



三猿板碑型 延宝7年(1679) 船橋市古作町明王院

近隣の初期の如来・菩薩像庚申塔



聖観音像庚申塔 寛文元年(1661)印西市竹袋観音堂



薬師如来像庚申塔 寛文10年(1670)船橋市葛飾本郷路傍



釈迦如来像(日蓮宗系) 延宝4年(1676)船橋市大神保町路傍

近隣の初期の青面金剛像庚申塔



二手青面金剛像と三猿 寛文11年(1671) 印西市砂田庚申堂内



六臂青面金剛と二猿 延宝3年(1675) 佐倉市海隣寺町愛宕神社



二手青面金剛と一猿・鶏 佐倉市下志津原路傍 延宝4年(1676)

第一部八千代の庚申塔 最古塔は?





八千代市高本八幡神社 万治3年(1660) 「万治三天庚子十月吉日 為庚申待現當二世悉地成就処 講人数十八一結諸衆 敬白」

高本の万治三年銘笠付角柱庚申塔

吉橋の高本八幡社の万治3年(1660)銘の 三面に一匹ずつ三猿を浮彫りにした笠付角 柱型が市内最古で、続いて、萱田飯綱神社 下の庚申塔もこの型式です。

この形態は、1691年まで千葉・神奈川・東京 に21基あり、うち、4基は八千代市域、3基が 隣接市域で、高本の万治の庚申塔は、それら の発祥の源となる貴重な文化財です。

なお、昨年(2019)に調査した保品の記年銘 を欠いた庚申塔も同形態で、これを合わせる と市内のこの類型庚申塔は、5基となります。 (⇒第2部)

市内唯一の地蔵像庚申塔







神野旧薬師堂 延宝2年(1674) 地蔵菩薩坐像塔「奉新造立庚申待為供養石仏地蔵一体二世安楽所」

佐倉市先崎 慶安3年(1650) 地蔵菩薩坐像塔「奉造立庚申人数廿五人/先崎村/ 本願友野河内/慶安三天/庚寅/二月廿四日」

青面金剛像庚申塔の出現

延宝2年(1674)八千代消防署前 市内最古の青面金剛像塔



貞享2年(1685)高津宮ノ前 前期では珍しい駒型

高津村の前期庚申塔

旧高津村の村境の延宝2年 (1674)銘笠付角柱型の庚申塔は、 青面金剛像塔として八千代市内 初出です。

以後、前期で約半数の12基に 青面金剛像が浮彫りされます。 多くは笠付角柱型ですが、高津 字宮ノ前の貞享2年(1685)塔は 駒型です。

前期の青面金剛像庚申塔



元禄5年(1692)小池庚申塚「妙法蓮華経・・」



元禄7年(1694)大和田円光院 「奉造立青面金剛··」



正徳2年(1712)神野字新山 「奉造立庚申待供養・・」 前期では珍しい光背型で、剣持六臂像

個性的で雄渾な像



享保5年(1720) 高津 自衛隊内



元文5年(1740) 保品字庚塚



寛保4年(1744) 大和田新田字太郎右ヱ門野



延享2年(1745)勝田字新山

個性的で雄渾な像-2



寛延4年(1751) 吉橋寺台字西芝山



安永3年(1774)勝田馬橋



寛政4年(1792) 高津字宮ノ前(自衛隊内)

道標付き庚申塔の登場

明和期ごろまで(~1770)は、「庚申待供養」「諸願成就所」などの造塔目的や願文が丁寧に彫られていますが、安永期以降は、「講中」や「村」名などを残して銘文は省略化されて行きます。

信仰目的から、村の共有の公共施設と しての性格への兆しが見え始め、一部に は、道標を兼ねる庚申塔も登場します。

寛延2年(1749)大和田新田字坪井向「むかうへゆけば さくらミち・・」



延享3年(1746)吉橋尾崎字芝山の庚申塔

地域的な特徴のある類似彫像塔

下総地域では、青面金剛像塔が数的にも 最盛期になる中期、個性的な彫像塔のほか、 画一的な特徴の像容の庚申塔が多数みら れるようになります。

主尊の目がアーモンド形で、右手に鈴状または人身の頭部らしき袋状のものを持ち、 宝輪を持つ手が直角で水平に伸び、迫力が ない邪鬼がうずくまる姿の特徴は、印旛地 区・印西地区から白井市や船橋市の東部、 我孫子市・柏市・栄町に広がっています。

三猿も、両端横向きで中央が正面向きの 形でよく類似し、配置される台座や塔身下部 のスペースにより、一列の平型、または三角 型に配置する特徴があります。

これらの特徴を大畠洋一氏が「生首持ち型 青面金剛」と提起、さらに印旛・手賀沼周辺 に限定してこの青面金剛像塔が118基、三 猿文字塔が17基あり、時代も享保3年 (1718)から宝暦12年(1762)の44年間に限 定されることが、石田年子氏により報告され ています。

地域的な特徴のある類似彫像塔



寛延3年(1750)真木野字台



宝暦9年(1759)吉橋高本 八幡社



宝暦9年(1759)小池庚申塚

後期の文字庚申塔



*1 文化13年(1816) 吉橋寺台字西芝山



*2 万延元(1860) 真木野字台

文字塔に代わる

江戸中期終わりの天明期(1780年代)ころからの庚申塔は、青面金剛像塔から三猿付文字塔に替わり、後期はほぼすべてが駒型の文字塔の時代になります。

前半は、主尊名が「青面金剛(王) (尊)」*1に、文政期頃からはほぼ 「庚申塔」+「講中」銘になりますが、 日蓮宗地域では「大帝釈天王」銘 *2が現代まで続きます。

そして幕末期、米本や村上では神 道系の「猿田彦命(大神)」銘も見ら れるようになりますが、数は少ない です。

後期の文字庚申塔-2

*1 文化15(1818) 吉橋高本八幡社



*1安政5(1858) 下高野仲新山

こだわりの独自色

単調な文字塔でも、書体にこだわったり*1、道標銘を刻んだり*2、梵字主体の意匠に凝る*3など、「違い」を見せようとしているものもあります。



*2 文化15年(1858) 萱田町字中台 「右むらかみ 左かやた道」



*3 文化6(1809) 保品字庚塚 種字「ウーン」

後期の文字庚申塔-3



*1 文化9年(1812)桑橋字作ヶ谷津 「奉参詣百社庚申塔」



*3 文化12(1815)麦丸庚申塚 「一百青面金剛王」

一石百(千)庚申

八千代市内に多石百庚申はありませんが、多石百庚申成立に先行する「一石百庚申」とみられる銘の 庚申塔が2基あります。

桑橋の塔*1は、百体の庚申塔を巡 拝、上高野の塔*2は千社を参拝す るという庚申信仰を表す「参詣型」、 麦丸の塔*3は、「青面金剛」・「庚 申」の文字を100または多数刻んだ 一石百文字塔を簡略した「百体型」 に分類しました。

北総の百庚申



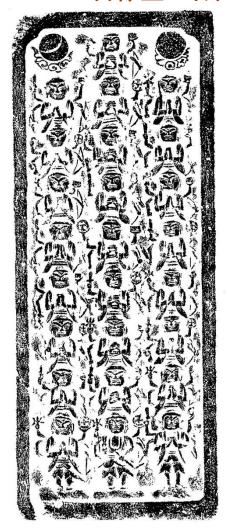
柏市布瀬路傍の百庚申 文政7年(1824)~明治8年(1875)



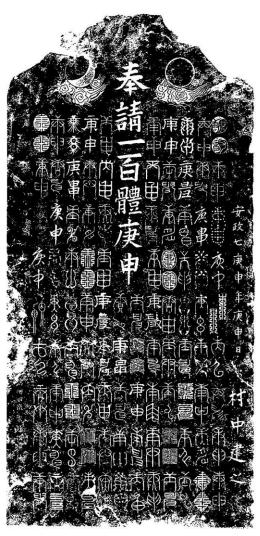


印西市浦部の百庚申 天保10年(1839)

百体型一石百庚申



群馬県倉渕 百体青面金剛塔 寛政6年銘(1792)



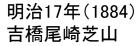
長野県野底 「奉請一百體庚申」 百書体庚申塔 安政七年銘(1860)



群馬県総社町「猿田彦大神」 百書体庚申塔 万延元年(1860)

近・現代の庚申塔







昭和15年(1940) 下高野字南 道標付



平成3(1991) 小池字庚申裏

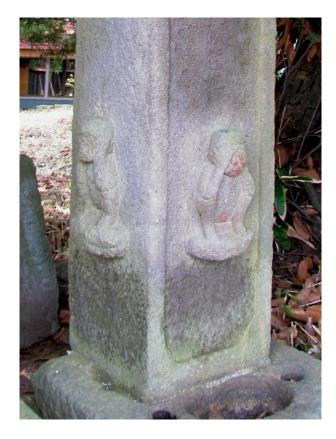
明治維新後も、庚申講の続いている町や村では、庚申塔が建て続けられ、明治から昭和20年(1945)の終戦まで99基、戦後の昭和期まで12基建立されています。

銘は日蓮宗地域で「大帝釈 天王」が残りますが、それ以外 ではほぼ「**庚申塔」に統一**され、 形態も一部自然石もあります が、概ね駒型になります。

萱田・村上や下高野・保品では、**道標付き庚申塔**が多く20 基を数えます。

平成になっても、下高野・神野や小池では、御影石製の新しい庚申塔の建立が続いています。

第二部 三面各面一猿付角柱型庚申塔 発祥と関東での分布



八千代市高本八幡神社 万治3年(1660) 「万治三天庚子十月吉日 為庚申待現當二世悉地成就処 講人数十八一結諸衆 敬白」



高本の万治三年銘笠付角柱庚申塔

吉橋の高本八幡社入口の、万治3年 (1660)銘の笠付角柱型の庚申塔は、 八千代市内最古の庚申塔で、総高140 cm、笠と塔身は一石で彫りだされ、水 鉢付の台座に載っています。

光背型の輪郭内下部に三面に三猿 を一匹ずつ浮き彫りし、上部には建立 年月日と願文、建立主体の銘が、また 猿の下には十八名の人名が刻まれて います。

三面に彫られた各猿(左:不聞・正面:不見・右:不言)の像容は写実的で丸彫に近く、笠・塔身・台座のバランスもよく、青面金剛が主尊として定着する以前の三猿主体の庚申塔としてたいへん優れた石塔です。

近隣地域への広がり-1

三面各面に一猿ずつ配し、願文を刻した笠付角柱の庚申塔の類似型は、市内・佐倉市・白井市など近隣にも広がっていきます。



寛文3年(1663) 佐倉市新町嶺南寺 (笠を喪失)



延宝元年(1673) 八千代市 萱田飯綱神社下 (左右面に男女別に人名列記)



延宝3年(1675) 白井市富ケ谷薬師堂

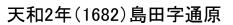


延宝五年(1677) 佐倉市 臼井田 お猿の松(水田内)

近隣地域への広がり-2

天和2年(1682)八千代市内の平戸と島田の日蓮宗系題目庚申塔にも、この形態が継承されています。











天和2年(1682)平戸字道地

近隣地域への広がり-3



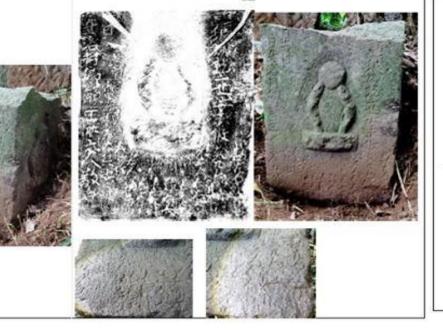
保品庚申塚の年不明庚申塔

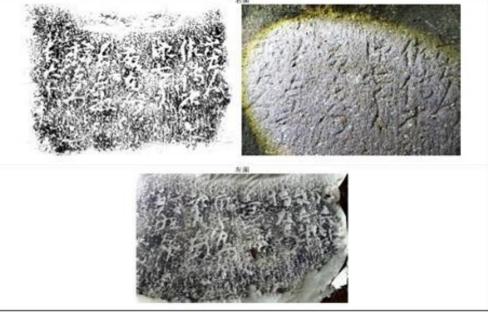
保品で調査した角柱型庚申塔の下部残欠には、左右正面に各一猿が浮彫りされ、「諸願成就二世安楽攸/ [] 月吉日/星名村郷願主廿六人敬白」と二十数名の人名が列記されています。

中世に使われた郷名「星名」の字は、 慶長7年(1602)の清宮家文書で確認 できますが、石造物では、年銘のある 享保11年(1726)銘の庚申塔以降すべ て「保品」となっています。

この庚申塔は、他の三猿庚申塔事例 と比較すると17世紀後葉の延宝期ごろ の庚申塔と推測され、保品では最古と いえます。







関東での類型庚申塔の分布



寛文3年(1666) 横浜市中田御霊神社



万治3年の八千代市高本と寛文3年 の佐倉市新町の塔に続いて、寛文年 間では横浜市・江東区・藤沢市など、 延宝年間では都内や小田原市・鎌倉 市の広がりが見られます。

千葉県内では木更津市吾妻神社に1 基あり、道標付きです。

千葉・都内・神奈川で計21基が確認され、約40年間続きますが、貞享と元禄期には三面にそれぞれ猿を配した上、正面に青面金剛像を付けた庚申塔も見られ、元禄期を最後に、三面各面一猿像庚申塔は姿を消し、青面金剛像塔に代わっていきます。

寛文5年(1666) 江東区亀戸普門院

関東での類型庚申塔の分布-2









寛文9年(1669) 藤沢市常光寺

延宝4年(1676) 豊島区高田2金乗院

延宝5年(1677) 小田原市飯泉村

延宝8(1680) 鎌倉市笛田中志房

関東での類型庚申塔の分布-3









延宝8 (1680) 台東区下谷小野照神社

元禄2年(16891) 茅ヶ崎市大六天神社

元禄5年(1691) 小田原市久野 大畑観音堂

元禄16年(1703) 文京区本駒込天祖神社

おわりに

高本の万治3年銘庚申塔を市の文化財にしましょう。





近世庚申塔の初期、正面向きの三猿を並べた板碑型は、各地に見られますが、角柱の三面に一猿ずつ三猿を配した庚申塔は、地域と時代が限られ、珍しい点もあって横浜市や藤沢市、江東区では市や区の文化財に指定されて保存されています。

高本八幡社の塔は、八千代市内最 古の庚申塔としてだけでなく、近世初 期の三面に三猿を配した角柱笠付型 庚申塔の初発といえることから、私は ぜひ八千代市の文化財に指定される べきだと思っています。

皆様方からご意見、また同型の事例 情報をお待ちしていますので、どうかよ ろしくお願いします。

ご清聴ありがとうございました